

商業の道義について

——中世の僧と哲学者の言葉から——

高 津 春 久

極寒のドイツの冬。貧しいものも苦しい算段のすえ、外套一着をあがなねばならぬ。十三世紀、庶民の衣料はいたって乏しかった。しかも寒さから身を守るために必要な品ともなれば、人の弱味につけこみ利をむさぼるものも現れる。

「外套をひさぐ商人の非道のふるまいよ。わが商いを正しく行う道も知らぬようじゃ。古いぼろ切れを売りながら、これをおこがましくも服だという。見るにたえぬ細切れの布。もとより壁穴でもふさぐほか何の役にも立たぬ代物である。この端切れを商人は糸でかがり、糊で固めて厚みを出し、貧しい下郎に売りつける。外套一着に下郎はおそらく半年のかせぎを吐きだすのだ。さて喜んで着てみるが四週間したら役立たず。それでまたも一着買わされる。」⁽¹⁾

人すべて信仰に生きた時代、その内実は百鬼夜行の世の中であつた。行く所どこにも欲深が待ちうけて、人の金をまき上げる。天の恵み、地の恵みを得て謙虚な暮らしを立てようという農夫も、正直一途とはかぎらぬ。

「百姓の多くは町のものに負けぬいかさま師。町に出て薪を売る。ひん曲つたのを中に隠し、真直な枝を表に



薪を売る農夫（1483年の木版画）

(3)
korn oder gras.

麦の穂の刈り入れに雇われる女よ。おまえは年季の入った泥棒であるが、いつも若いこそ泥をつれてくる。そして一握りずつ助手に渡して、わらの間に落とさせる。日が暮れると幾人かで畑に入り、それをくすねる。薪も干し草もこうして盗む。自分の家畜を他人の畑に入れて穀物や草を食わせる。

よこしまが世のすみずみに行きわたる。商人、職人の不屈きは人目をはばからぬ。不正は、作ったものを売るときに起こるとは限らぬ。お金をもらって働く雇い人も悪巧みを知っている。人の悪はよほど根深いものらしい。

出して束をくくる。薪とは名ばかり、実は中の空気を売っているのだ。それから干し草をよく干しもせず車に積み、これも中の空氣ごと干し草として売っている。⁽²⁾

Unde dū, snierin, diu daz korn ab dem velde snidet! dū alte diubin, dū hāst ein jungez diubelſin nāch dir gēnde, unde dū truckest im eine hant vollen nāch der andern nider in die halme nider. Sō steht ez etelſche nahes an dem velde, sō steht die holz, sō steht die gras, sō irbet der sîn vihe uf eines andern

「雇い主が見ていると、雇い人はしっかり働く。主人が気を許して背を向けると、こちらは早速背伸びしておしゃべりやらゲラゲラ。二、三人いても仕事は一人一日分もはかどらぬ。下男下女はいつもこんな風。猫が出て行くとねずみの天下。頭をおさえるものが居らぬと、あなたの雇い人も破目はずし、大げんかやら大喜び。さて主人が帰ってみると、仕事ができてないどころか、不仕末を二つも三つもやらかし、その片付けに連中を追いまわすことになる。」⁽⁴⁾

どちらを見ても、人の行為からにじみ出る毒液が世のすみずみまでけがしている。説教家ベルトルトの毒舌が、人の不実を暴いていた時代は、ドイツが諸侯に君臨する統治者を欠いた大空位時代（一二五四—七三）であつた。この僧の言葉は、展望のない時代が自己に向けた警告の声である。まるで悪魔が支配するような世を目の前にして、僧はひたすら悔い改めることをとめた。その言葉は熱を運び、警告は世相を微細に再現せずにすまなかつた。いま、遠くへだたりそれを聞くわれわれは、ここに得がたい中世の風俗絵図が残されたことを有りがたく思う。

神が造られたこの世界は無上の調和の中にあつて、そこに人間の悪は本来なかつたはずである。「神は万物を賢明にお造りになった。この世に住むものはだれも身に十分なものをもとい、肉もパンも、また飲みものとして密酒、ワイン、ビールを、その上に魚や野のけだもの、家畜までもれなく授かるよう手配なさつた。世の中のだれもかも、これらを十分与えられるよう造られたのだ。天にもちょうど同じくらい十分な星をお造りになった。それで天の星に何か足りないものがあると、地上に住むものの健康その他大切なものにも支障が起こるわけじゃ。神さまは天上に過不足なく星をお造りになったように、地上のものもお造りになった。金、銀、食物、衣服など

である。『そこでございます、ベルトルトさま。神さまはまるで不公平な分配をしておられます。私はじめ多くの貧乏人は、おいしい食べもの飲みものなど口にすることができません。金、銀、衣服など持つてはおられません。』それはどこかに横取りするやつがいるからじゃ。高利貸し、盗賊などである。⁽⁵⁾

暮らしに不自由するものが出来るのは、どこかに他人の分まで取るものがあるからだ、という。神が造られたままの世界はそうではなかった。人の糧はつねに目の前にあった。野からただ拾い集めればよい。そうすればすべての人間が食えるのだ。そこでは何もかも十分あった。多すぎず少なすぎず、バランスのとれた配合だから、人間がこぞって利用してちょうどという風にできている。このような原初の神の樂園に住むためには、人間の社会もそれにふさわしいものでなければならぬ。人が人を守り、他の利益を奪うことなどない美しい連帯互助の共同体でなければならぬ。

人の作る社会は、どの身分のものも、おのずから他の身分の生活を支えるようにできている。社会とは同胞扶助の仕組みだ、と当時のスコラ学は説いていた。家族や門閥の結びつき、同じ教区や町に住む人びと、同業組合などがそれである。交通不便な過疎の地に隣り合った二軒の家は、一方が困ったとき、他が救い手となる。経済的にも倫理的にも二軒は兄弟以上の親密な関係に置かれる。一方の家に何か不足が出来てやりくりのつかぬとき、他は無償でそれを与える。一方が人手を必要とすれば、他は急いでかけつける。人間社会はこのような二軒の、欲得ぬきの関係が大きくなって生まれたのであるから、つねに助け合いの精神を基本としなければならぬ。こう考えた十三世紀は、のちに人の社会が経験する多くの矛盾をまだ知らなかった。社会をよき隣人の集まりだと考えていた。神が与えられたすべてのものと同じく、人の社会も自然に生まれた汚れを知らぬものだと考えていた。

しかし神によって与えられた中世の社会は、人をへだてる身分の壁に区切られていた。すべての人間が平等とは考えない。人が自分の職業によって他人に役立つことも、主人と従者、支配者と奉仕者の解きがたい対立を前提とした。階級と職務の区分を通して人の社会を機能させるのが神の御意であるとする。思し召しに反し万人を同列に置くことはできない。富めるものの兄弟愛は貧者に対する哀れみや介助となつて表れ、貧者はおのれの身分に満足し、上のものに奉仕してこれに報いる。貴族と農夫が立場を替えることは永久にない。服を二着持つものは裸のものに一着めぐむことを強いられるわけではない。だが君主はわが畑を耕作するものすべてに、衣食と住まいを保証するであらう。耕作するものも誠実に働き、収穫は正直に君主に引きわたす。中世社会の主従のへだては、こうして愛の家父長制ともいえるものを作りあげた。固定した階級差別のあるところに、かえつて愛の共同体が具体的な意味をもつたといえる。

ペルトルトの説教はこの中世的な愛の共同体の崩壊をいくども予告している。どのような職にあるものも、もはや万人のために自分の勤めを果たそうとしなくなった。主人は従者を愛することを止め、従者も主人を愛して仕えることがない。いまや二人は、見境もなく自分の利益のために行動し始める。二人の間にもう心が通い合うこともない。われひとりの成功と利益が隣人への思いやりに優先する。人を働かせたのち、賃金も払わぬ主人。商品の品質をごまかし、目方までもごまかす商人。人は万人を利用するためにはや働くのではない。労働は個人のエゴイズムを促すためにある。職業の全体秩序はここにくずれ、各自気ままに利益をもとめる風習だけが残つた。

ペルトルトが説教した一二六〇年前後、農耕経済は貨幣経済に変わろうとしていた。貨幣が人の生活と道義に

及ぼす影響は計り知れぬものがある。商業と金銭の流通は富を少数の手に集中し、周囲には貧困と悲惨な暮らしを拡大したのである。自然の恵みを人の労力が引き出すかぎり、物らは人の必要をみたして十分ある。しかも物は公平に配分されるであらう。貨幣は新しい価値を生むものではない。本来は交易を容易にする仲介物にすぎない。誠実に働き、金を手にするものがある傍ら、軽便で威力ある貨幣を不正の手段によってもうけるものが現れる。窃盜、強盜、いかさま商人がこれである。不正の裁判によって裏金を受けとる行政官、不当な税、関税などを取り立てる代官などもこれに入る。また人に金や穀物を貸しつけ、利子をかせぐものがある。彼らは働こうとせず、愛の共同体への参加を拒むものである。彼は本来自分のものではない時間を人に売りつけている。人に時間を与え、また奪うことは神だけにお出来のこと。彼は恐れなくも神のものに手をかけ、自分の商品とするふときものである。

Unde dâ von sprichet ein heilige: 'wâ von haben die vogel genuoc unde wâ von sint sie als schœne? wan sie haben doch weder huobe noch ander gelt. Seht, daz ist dâ von: als einer gizzet daz er genuoc hât, sô læt er den andern ouch ezzen.' Sô sint disiu armen gotes kinder, daz ir etelichez kûme die schame bedecket, unde sie geruowent niemer tac noch naht vor grôzer arbei, unde gênt dâ bî nacket unde blôz unde geiligent niemer sanfte noch warm unde gezzent niht vil baz danne ir vilhe unde sint bleich unde mager. Seht, daz ist dâ von, daz inz dise gûgen liute mit untriuwen an gewinnent unde mit unrehte, unde swaz sie derarbeiten, daz gêt den gûngen hin hein. Wan er ist eht alle zît arm unde nœtic, und er gêt zuo dem gûngen unde sprichet: 'herre, lhet mir ein

malter kornes, ich gibe iu hin ze dem niuwen ein halbez und ein ganzer.' Und alsô lîhet er des jâres vierzic ûz oder lîhte hundert oder fünf hundert. Unde dise armen lûte müezent im umbe sus arbeiten. In werde vil oder wenic disen armen lûten, sô müezent sie anderhalb malter umbe daz eine geben. Ersleht ez im der haget oder wirt bisezze unde reise oder swie ez gêt, sô muoz er inz gar geben. Unde hât er anders niht, er muoz im sîniu rinder ûz dem pfluoge geben. Unde dâ mite nimet dirre mit grôzen arbeiten abe an sîme guote; sô nimet jener mit müezikeit ûf.^⑥

ある聖者のお言葉にいう「なにゆえ野の鳥はいずれも十分に食して、かくも美しき姿を得たるや。鳥には割当農地も他の財産もなきゆえなり。これを詮するに、一羽ついでみてよく足りれば、他の鳥もわれとともについでむことを許すゆえなり。」さて神の子らともいえる人間はどうであろう。あるものは隠し所をおおう布切れも持ち合わせず、夜も昼も汗水たらし、休む暇とてなく、裸でうろついては、寝てもそわそわ落ちつかず、自分の家畜より大して上等のものも食ってはおらぬ。それゆえだれもかれもやせて青白い。よく知れよ、こうなるにはわけがある。例の欲深どもが、不実不正により人のものをかすめとるからである。人がせっかく働いて得たものが、欲深の懐に納まる。それというのもしつも暮らしに困っている貧乏が欲深のところへ行って頼みこむ「だんな、麦を一石貸して下されば、来年一石五斗にして返します。」そう約束して今年は四十石、いや百石も五百石も借りることになる。こうして貧乏人はだんなのためにただ働きする仕組み。豊年が来ようが、不作が来ようが、受けとった一石に一石半は返さにならぬ。作物が雹にやられようが、

凶作、戦乱、どんな災害が降つても、きちんと一石半にして返す。ない袖が振れぬなら、いま犁を引く牛もはずして渡さにならぬ。こうして貧乏人はせつせと働きながら財産をなくし、だんなは遊びながら殖やす。

物を貸し利息をとることは、カロリング王朝以来教会の禁するところであつた。一〇五九年、法王ニコラウス二世による高利貸の破門。一一三九年、第二次ラテラノ公会議の利子徴収禁止令。また一一七九年の第三次ラテラノ公会議は利子かせぎをさらにきびしく追及した。それ以後の教会会議も利子かせぎの根絶を繰り返しかえし試みるのである。

欲深は将来のために投機する。高利をとって金を貸す、物資を買いしめ、後日高値で売る。十三世紀になるとドイツでもこのような商行為が目立つた。商人にとって時間はあらゆる利益の可能性をふくんでいる。およそ商人の行為は仮定の上に組みあげたものである。飢饉の来ることを見越して穀物を死蔵する。仕入れては機を見て売る。このような行為は、神によって支配される時間を盗み、これを自分が利潤をあげるための道具とするのである。非道な商人は神のゆたかな贈物を他人と分け合おうとしない。それをひとり占めして隣人から奪おうとする。彼はすべての人に属するものをすべての人に売りつける。身勝手な経済行為は、このように自然と全生物に対する罪科を重ねている。教会の制止も時代の勢いに抵抗できなかった。

ヨーロッパ経済史のこの注目すべき転回点は、十字軍以後海上貿易の拠点となった上部イタリアにまず訪れる。やがてそれは中部ヨーロッパにも波及した。金銭が通商の指標単位であるだけではなく、それが利子を生む素晴らしいに人びとは気づきはじめる。教会が金銭の不毛を説いても、金が生む子の金は町の商人や金貸しの愛すると



両替商の部屋（1478年の木版画）

ころとなる。小作料の支払えぬ小作人や、地位にふさわしい体面をつくらおうとする貴族などに金を貸した。金銭をたくわえ、金融業を営めば、新しいこともいろいろ可能になる。金さえあれば家柄や封建的序列など飛びこえて権力を手にすることができる。投資したり利息をとって回転すれば望みのまま殖やすことができる。金もうけのための金もうけほど楽しくも魅力的なものはない。味をしめて、他人に損させても利益を取ろうとする。

神が造られた自然の中で、生物は寒ければ木陰、岩かげに身を守り、腹が空けば餌をもとめる。個体の欲求を個体がみたすかぎり、自然の機構が破壊されることはない。ところでここに金の力によって、絶え間なく金を殖やすことが発明された。攝理にもとる罪業の最悪なるもの、神に歯向かう犯罪とされる。説教僧は機会あるごとにこの問題に立ちかえり、世にはびこる利殖者を罵倒する。金銭が労働の対価であることを止め、自立した価値を持つことを、時の道義を危くする問題として受けとめた。

ドイツの説教文学は十二世紀まで紋切り型の辞句にあふれていた。禁欲と博愛の実行を一般的な形で聴衆に呼びかけるに止まった。いまや国に統治者なく、経済も人の暮らしも異例の事態に見舞われた変革期の説教は、それまでの悠長な文体で人を説得できるものではない。十三世紀の説教は下層者や庶民を相手に人間と生活への真剣な問いかけを持つこととなる。この時代に教訓文学は広範な人間論の視点を獲得して冴えかえる。

説教者は自らも貧しく、貧しい民衆のもとに行き、ともに暮らしては、説教した。教会とは限らず、路上や広場で説教したのである。民衆を前に今彼らが必要としたのは、聞くものの心をゆさぶることのできる生きた言葉であった。説教師は日常の見聞を題材として、庶民が解決をねがう根深い問題に対応しなければならぬ。彼は自分を聴衆のひとりとし、彼らと直接ふれ合うことによって、その言葉も力を増し、民衆を動かすことができた。彼の説教は「私」といふべき所を「私たち」という。いろいろな職業のもの、ひとりひとりの罪あるものに僧は向かい合った。彼は説くものであり、また聞くものでもある。だから聞き手を代弁して、説教者への反問さえ紹介している。説教内容に対して高揚する聞き手の関心を、いわば対話形式によって解放する意味があった。

正しく生きることへの民衆の問いは、安堵して寄るべきものを持たぬとき、一きわ強まる。人それぞれ世にあつて選ぶ身過ぎのわざは、今のままで正しいといえようか。上に立つものの指導、下にあって仕えるものの働き、これが総合して目に映る世の有りさまは、とうてい満足できるものではない。まことの悪人はどこにひそんでいるのか。世の中に不幸せの人数だけは、どうしてこのように多いのであろう。人の社会がようやく形を作りはじめたころ、幼い疑問はまず人間の職分や社会組織の問題に向けられた。民衆の関心に答えて、ドイツの托鉢修道会僧の説教はしばしば職業批判をテーマとした。職業別に人の生活をリアルに再現し、悪の根源を見定め、反省を促す。このときドイツの説教はその時代に最も接近し、民衆との一体化をとげて説得力を高めた。

百姓、牛飼、靴屋、大工など、人のなりわいに区分が生ずるのは、人間の社会生活の歴史とともにきわめて古い。人それぞれの能力と好みの差異が、違った職業を選ばせることとなる。だがすべては神の配慮に出るのであって、神が人の心に異なる好みと力を設けられたのは、生活に必要なものがすべての人に供給されるよう、あ

らかじめ人の職分を多方面に分散されたのである。私有財産を基礎とする社会で、個人が必要なものを手に入れることは、物資の交換によって可能となる。およそ社会生活の一つの目的は、居住者の必要をよりよい形で満たすことであるが、これは品物の交換、または売買によって達成される。それゆえ職業の分化と物資の交易は一体を成し、同時に発生する。両方が揃って、町や集落に住む人にあらゆるものが供給されることとなる。ある地域の居住者が品物を交換するとき、物は生産者の手から消費者に直接渡された。商人というものが介入しない。中世経済の基本形態は、作った人が必要とする人に手わたすこと、作り手と受け手の倫理的関係が色濃く物にまつわる。

ところでせまい集落の中で十分な自給自足が見られることはまれである。不足するものを他からもとめることを迫られる。また二、三の物にかぎって住民が使い切れぬほど収穫され、遠くの人に使われねばただ腐るだけということもある。この二つの場合に商人という人種が現われて活動する。しかし自給自足の状態は、商人の売るものを食うことにまさると中世人は考えた。土地で取れる食料は戦乱、平和を問わず、確実に供給される結構なものだ。商人はとかく軟弱、有害の風俗まで他国から輸入する。風紀道德の荒廃はつねに商業が引きおこしたものだ。同じころトマス・アキナスが商業に下した裁断は否定的なものである。

Rursus, si cives ipsi mercationibus fuerint dediti, pandetur pluribus vitiis additus; nam cum negotiatorum studium maxime ad lucrum tendat, per negotiationis usum cupiditas in cordibus civium traducitur, ex quo con-
venit, ut in civitate omnia fiant venialia et fide subtracta locus fraudibus aperitur publicoque bono contempto

proprío comodo quisque deserviet deficietque virtutis studium; dum honor, virtutis præmium omnibus defer-
tur; unde necesse erit in tali civitate civilem conversationem corrumpi.⁽⁷⁾

ところでもし市民が商業に熱中すると、さまざまな悪徳に道が開かれる。商人の熱意が利潤をもとめるとき、商業にそまつた市民の心に欲望が移植される。すると国中のあらゆるものが気ままとなり、信義をはずれ、欺まんがはびこり、公務をつかさどるものがさげすまれる。人びとは自分ひとりの利益に奉仕する。そして徳への情熱は消えてゆく。他方名誉と勇氣への賞賛が、だれの心からも奪われる。このような国家ではかならず市民の結束も消えて行く。

アリストテレスはその政治学の中で、家を国家構成要素の最も小さいものとし、家政のあり方を論じている。⁽⁸⁾ 彼は家政術(οικονομική)と取得術(χρηματιστική)に区別を設け、前者は利用、消費に関すること、後者は収益、獲得のこととする。取得の術には直接取得法と間接取得法がある。直接法とは遊牧民、狩人、漁師、百姓などのように自然界から直接食料を手に入れる方法。この行為は家政術と接して区分しにくい所がある。自然界からの直接取得に対し、家政に必要なものを交易によって入手する間接取得がある。たとえば決済の便宜のため通貨が利用されても、初期の交易は自然にもとらず、必須のものであった。通貨が発明されたのは、交易に必要だからである。これは家にとって間接取得であり、金銭の形で取得される。このような取得もまた自然とされる。入手された金銭は、家計の必要をみたす品々の総和と考えられた。

この間接的自然取得から生まれたものに商業(*καπηλεια*)と呼ばれるものがある。「これは技巧と修練のわざであつて、自然のわざではない」とアリストテレスはいう。これは品物を売るとき、できるだけ多くの利益を収めようとするわざである。交易の目的は、いまや自然な需要を満たすことではない。できるだけ高い貨幣の山を積み上げようとして、止まることを知らぬ富への願望と化する。自然な取得術はやがて商業のことを指すものと誤解される。ここに相容れない二つの取得のわざがある。自然な富と自然な取得は家政のわざにふさわしい。他方不自然な技巧的取得は、いわゆる商業であつて、これは物を得ようとするのではない。物を売ろうとするだけである。売つてもうけた金銭だけに関心がある。金もうけを目的とするこの行為こそ、アリストテレスの拒否するところである。人間の力がふさわしくないことに向けられている。勇氣は金を集めることなどに使わず、英雄的行爲をあらわすために發揮せよ。金は人間が感覺的享樂をもとめるとき集めるものだから。古代ギリシャの金銭と商業についての評価はここに集約されている。

つぎに中世スコラ学の完成者トマス・アクィナスの商業に関する言葉を引いてみよう。およそ中世人が商業について考えた事柄の公約数がここにある。彼は物品の交換に二種類あり、その一つは「いわば自然な必要からある」(*quasi naturalis et necessaria*)交換だという。生活の必要をみたすため物と物、物と金が交換される。商人はこれに係らない。投機的要素はここにはない。現実には不足するものを手に入れるために本人同志交換する。

Alia vero commutationis species est vel denariorum ad denarios, vel quarumcunque rerum ad denarios non propter res necessarias vitae, sed propter lucrum quaerendum; et haec quidem negotiatio proprie videtur ad

negiatores pertinere, secundum Philosophum.⁽¹⁰⁾

もう一つ別の交換は通貨を通貨に変えるか、何かの物を通貨に変えるのであるが、生活に必要なものを手にするためではない。金もうけのためである。アリストテレスによれば、これが本来商売人のする商売なのである。

商売の本質は交易によって利益を得ること。商うとは、「より高く売るために、あるが上に買って置く」(*ad hoc emi, ut carius vendat*) ことである。トマス・アクィナスが物の交換、交易に強くもとめることは取引の正当性である。およそ二人の人が向かいあうとき、一方の与えるものが、他方のもとめにかない、同一でなければならぬ。正当、正義という語は合致(*adaequatio*)とも訳すことができる。第一の目安として、甲が乙に渡す品と乙が甲に渡す品が等価値でなければならぬ。大工と靴屋の間に正当な取引がされるとする。大工が靴屋の小屋を建てるため調達する木材、粘土、麦わらの費用と大工の三十日間の労働が、大工とその女房、子供が五年間ではきつぷす皮靴数十足と等しい価値を持つと両者が認めねばならない。このとき相手が自分に与えた材料と労力を、自分から相手への供与によって慰め、かつ償うという心情が当事者にあった。取引きするものは相互に感謝し慰め合うのである。

物の交換が一般化し、広い地域で行われると、売買を仲立ちするものが必要となる。金、銀、鉄は熔いて、装身具、容器、武器となり、値打ちが変わることがない。刻印して重量を保証し、交易の仲介となった。貨幣がで

きると、これが品物の価値を計り、値段が数で示される。品物が生まれるまでの原料や労力が数字で示され、正当な取引の指標となる。これまでの麦とワインの交換率は、この二つが自然界に占める固定的な序列によって決まっていた。だが通貨によってこれらを評価すれば、各年度の収量と品質から決まってくる市場の人気や需要を鋭敏に反映する。通貨の発明は交換の成立にも大きい影響を及ぼした。ワインを持つ人と穀物を持つ人が出会う。前者は有りあまるワインを持ち、また穀物を当面必要としない。後者はワインを欲しがっている。物々交換の時代に、この二人の取引は成立しなかった。しかし貨幣経済となれば様子は変わる。金銭が後日必要となる物資の担保となる (*idejussor futurae necessitatis*)。ワインを持つ人は数ヶ月後に穀物を欲しがらうであろう。だから今のうちワインを渡して支払いを受けておく。

金銭は複数の働きを持っている。まずいろいろな物品の値打ちを計り、それを数値で表わす物差となる。次に物の交換を代行する決済手段である。さらに物の価値の消失を防ぐ換算手段である。いずれも金銭に本来的に備わる機能ではない。人が決めた約束ごとに過ぎぬ。金銭で表わされる物の値段は、購買者の欲求という主観的要素によって大きく変動するようになった。しかし売買当事者の自由になるものでもなかった。この売買が人の分業を基盤とする共同社会で行われる以上、分業の状態が破壊されてはならぬ。ここに住むすべての人のために物を作っている以上、職人はだれも原料と労力を償われねばならない。靴屋は損するために靴を作るのではない。工賃の補償こそは分業社会が存続する必要条件だとアルベルト・マクスはいう。主観的な物の価値は、中世社会の中で限りなく客観的な価値に近づく。当時の町や集落に住む人のすべてに求められた了解事項が、それ(11)を支えているのである。《*multitudo artificum sibi invicem subserviens commanere facit civitatem.*》⁽¹¹⁾「多くの職人衆

が、おたがいのための奉仕と心得て仕事をつづけることが町を存続させている。」市民は別々の仕事を持ち、一人ではわずかなことしか出来ないが、半分は他人のために働くのだという気持ちでいなければならぬ。それでこそ人の社会は保たれる、というのである。この哲学者は中世の社会奉仕的な提供を理想としながら、現実には存在した反社会的な事例も見落としていない。意図的な欺瞞商品の第一は品物の形状的欠陥 (*defectus secundum speciem rei*) である。偽物の金や水で割ったワインを、本物でまぜ物なしと言い張ることである。その第二は量目の欠陥 (*defectus secundum quantitatem*) である。にせの分銅、物差を用いて売る。第三には品質の部分的欠陥 (*defectus ex parte qualitatis*)。病気もちの馬を達者な馬といつわり売るようなことである。売手は買手に品物をよく吟味させ、何もしわれぬ先に値を引くべきである。

商人は仕入れて売ることにより値ざやをかせぐ。この利潤は正当とされようか。この地に不足し、かの地に有りあまる物資を運びこめば、この地の民は感謝する。商人の活動が、全体のよき共存のために、成員のそれぞれが奉仕するという中世社会の理想にかなう限り許されるはずである。彼の利はいわば仕入れ、転送、販売の労賃程度 (*quasi stipendium laboris*) であるべきだとトマス・アクィナスは説く。⁽¹²⁾ とくに商人は隣人を欺いてはならぬ。仕入れ値、売り値は適正であるべく、商人にはブラトンのいう「慎重深い利潤」(*κέρδος μέτριον*) だけが許される。商業には留めどなく利を追求する荒々しい欲望が宿っているが、利益を最終目標とすることは許されない。あえて商業の本性を押さえ、「高貴かつ必須の目標」(*finis honestus vel necessarius*) を設定しなければならぬ。商人がわが家族を養い、困窮者にほどこす。または祖国にとほしい物産を他国で買いつけ、同胞を喜ばせるなどである。中世の民衆が権力者の施しに格別の倫理的な意味を見出したように、持てる商人の利の追求は、広く社

会を利する意図がなければ承認されなかった。商業といえど物々交換の道義の影を濃く引いている時代であった。いわゆる商売根性は、個人が共同社会の維持のため職業によって貢献する立場と本質的に相容れない。商いする個人は他を置き去りに、われ一人の利益を追求したがる。十三世紀は商業の芽生えが、前時代の道徳の支配下にまだためらいの色濃く、しかも自立しようとする面白い時代である。族長時代の道徳が、人間の利己的な本能と対決するとき、大きな実験を前に批判力の弱い人間が途方にくれていた。節度ある共同生活が崩れると、人間の欺まんが吹きだす。欲望の衝突が、人間にあるかぎりの矛盾を形にして見せた時代である。

托鉢修道会僧ベルトルトは民衆とともに時代の混乱を考え、それを解決しようとした。そのため彼の説教は、当時の社会を構成したすべての職業の役割を再吟味している。キリスト教世界の指導者として、神からこの世をゆだねられた聖職者が最も高い地位にある。教皇、総大司教、枢機卿、大司教、首席司祭、助祭、副助祭、司教補佐、主任司祭、司祭補、教皇使節、修道院長、尼僧院長、シトー派修道僧、ベネディクト派修道僧、跣足修道士、免罪説教僧などである。次には地上の行政をつかさどる騎士階級。皇帝、王、公爵、宮中伯、方伯、辺境伯、騎士、顧問官、裁判官、代弁人、代官、家人である。その下に市民、商人、職人の階層。小商人、旅館業、パン焼き、肉屋、粉屋、羊毛をつむぐ女、羊毛織工、仕立屋、外套作り、古着仕立直し、皮なめし職、靴屋、鍛冶屋、金細工師、貨幣鋳造師、ろくろ師、大工、石工。その外に農夫、女刈り入れ人、日傭い、女中、下男、医師、娼婦、取り持ち女。

今の世を傾けた責任は彼らの職務不履行と怠慢にある。彼の説教のいくつかはこの判断から、いわば全職業総ざんげの体裁をとっている。本来ならば俗世を指導する位置にある僧侶階級に批判が集まるはずであるが、ベル

トルトの毒舌も相手が教皇、高級聖職者ではなぜか冴えない。聖なるキリスト教徒の社会がよき指導者を持たぬことに、すべての地上の悪は由来すると説いたあと、聖職者批判がかなり具体的な形をとる部分もある。

Bischöve und ir andern präläten, iu hât der almechtige got geben schone leben unde grôze êre dar umbe verlinen, daz ir dem almehtigen gote sîne lute unde sîne kristenheit behüeten sult unde beschirmen mit rehter meisterschaft. Und ir werltlichen rihter, ir sult iuwer schâfzabel sîn lâzen und iuvern tagalt und iuwer vederspîl unde sult anders niht schaffen, wan daz ir guote meister sît unde die kristenheit in iuwerem schirme haben soltet, in iuwer huote und in iuwer pflege, daz ieman dem andern dehein leit getæte an lîbe und an guote und an ir fri-
(13)
unden.

司教はじめ高位聖職者の方々、神があなた方に美しい生活や高き地位を与えられたのは、全能なる神の民とその信仰を、正しくみちびいて守るためである。また俗世の統治者は将棋盤も娯楽も鷹狩もすべて投げ出し、よき主人としてキリスト教徒を守りいつくしむことに専念されよ。他人の命と財産と身内に害を及ぼそうというものが仮にも現れぬようにしてもらいたい。

風俗の乱れ、不正の横行を防ぐことこそ聖職者と王侯の務めであるとし、彼らの十分な監視を促す。しかしこの僧が庶民の行動を批判しはじめると、言葉は急に生彩を帯びる。困窮の果てに人びとは浅ましい行動に及ぶ。

少しでも得をしようとあせる姿を、よくここまでというほどに描きだす。この僧の目は利益を前にした人間の心の動きをよく見抜いていた。何が当時の社会不安を起こしているかもよく知っていた。彼の説教が非難する時代の病は *gilekeit* (欲深) 、*unkinsche* (淫蕩) 、*höchwart* (虚栄) 、*ketzerie* (異端) の四つであるが、欲深は七十八回、淫蕩は三十五回、虚栄は二十八回指摘されている。彼が時代の病変を経済的な体質の変化に見ていたことが分かる。物品と人の接点に起こる忌むらしい事どもに、彼はいつも話の焦点を定めた。時代の病をそこに見ていたからである。

欲深は高利貸、買占めなどをいうだけではない。職人や小売商の中にも商業道徳を無視する欲深ものはかなりいた。同時代の哲学者は商業の公正を価格や利潤の点で問題としたが、むしろ悪に徹して故意に欠陥品を作り、買手をだますものがいたのである。

Dû schuohewürke, dû brennest die solen und ouch die flecken, unde sprichest: 'seht, wie dicke!' sô sie herte sint; sô er sie danne tragen wirt, sô gêt er kûme eine wochen dar ûffe. Dû trûgener! dû trûgest manigen armen menschen, wan die rîchen getarst dû niht effen. Dû zapfenzieher, dû tuost dînem amt ouch selten rehte: dû giuzest eteswenne wazzer in den wîn oder fûlen wîn in den guoten, daz ein mensche eteswenne grôzen siechtnum dar an trinken mac. Dû bist ein diep, wan dû gibst der rehten mâze niht: wan swaz dû im dar an behabest daz hâst dû im verstoln, unde dîner sêle wirt niemer rât, dû engeltest danne unde gebest im wider, ob dû ez maht⁽¹⁴⁾ geleisten.

靴屋よ、おまえは底皮も表皮も火であぶり、硬くしてからいう「だんな、この通り厚い皮を使っています。」客がそれを履いても、一週間歩けるものではない。詐欺師め、おまえは下積みの人間を大ぜいこの手でましておるが、さすがにお偉方をだます勇氣はない。またワインを売り歩くものよ、おまえも正しい商いをすることはまれである。時にはワインに水をまぜる。傷んだワインをよいのにまぜる。それを飲んで重い病にかかるのがある。またおまえは泥棒である。ワインを正しい升で計って売っておらぬではないか。客に渡さぬ分は、すなわち盗んだことになる。それを客に返さぬ限り、おまえの魂は救われぬぞ。

Du rehter trügener ungetriuwer! du beheldest eht dñ fleisch unz ez erfület under dem velle, sô blibet ez gar wîz; die wîle daz vel drobe ist, sô wænet ein biderman ez sî gar guot unde frisch: sô ist ez fîl; er mac den têt dran gezenen oder grôzen siechtuom. Du trügener unde dû ungetriuwer mörder! Dar umbe solten die burger von der stat gebieten, swenne man in sumerigen zîten ein kalp oder ein lamp abnæme, daz man ez sâ zehant ville und im daz vel gar abe ziehe, unde daz zwêne biderbe man oder vier daz bewæren, daz ez zîtic sî daz sie dâ abe nement, unde daz ez gesunt sî.
(15)

この不実なる詐欺師め。毛皮の下肉が白く色を変えるまで、表に毛皮を残しておく。皮が上に付いてるかぎり、新鮮なよい肉だと正直者は思いこむ。だが中では腐っているのだ。正直な男はこれ食べて死にもす

る、また思うて苦しみもする。詐欺師の上におまへは人殺しであるぞ。ゆえに市当局は敵命し、夏場小牛、羊など解体するときは、ただちに皮をむき丸裸となし、尊敬できる人、二人または四人を立会人として、屠殺時期の適正、病氣持ちの肉でないことを保証させるべきである。

日常的に見られた職人の詐欺行為でありながら、一つ一つが悪の企みとして小説の素材となり得る。昔の人の行動は、その単純さも、愚かしさも力強く表れた。だまされ易い人間も多かったと見える。単純な悪が成功するためには、中世の愚直者がそこに居なければならぬ。単純な人間同志が売買する、両者の意図、善悪はおおうべくもなく鮮明である。何を手渡し、受けとるかという問題があるだけである。商業の原点においてこそ、人間行為の倫理性が隠れようもなく問われている。商業は後年仕入れと販売に複雑な迷路を発明した。そこに悪い意図があろうとも、売買過程のそれぞれから見えなくする技術も開発したのである。遠い昔、悪人も善人もひとしく正直者であった時代がある。彼らの群を今しばらく歩かせて観賞してみよう。

Daz sint goltsmide, pfenningsmide und ander smide unde zimberlute oder isensmide unde swelher leie sie smiden können, unde steinmetzen und drehsele, oder swelher leie sie dâ können, ez sîn dise oder jene, die mit isin wirkent, die hoerent alle samt zuo einem kôre, unde der möhte man ouch deheine wîse enbern. Unde sie sulnt alle samt getriuwe unde gewære sîn mit ir amten, sie wirken tagewerk oder fürgrif, wan daz tuont in dem amte vil zimberlute unde steinmetzen. Unde wirkent sie tagewerk, sie sulnt niht deste træger sîn, daz der werke

manigez werde. Ist ez fürgrif, sô solt dû niht desie balder dâ von îlen, daz dû sîn schiere abe kumest unde daz ez über ein jâr oder über zwei dernider valle; dû solt ez mit triuwen wirken, reht in der wîse als ob ez dîn selbes wære: sô sehest dû gerne, wie getriuweliche man dir wûrhte. Als gerne dû sehest, daz man dir getriuweliche wûrhte, als getriuweliche soltû dînem næhesten tuon. Ez sîn goltsmide oder ander smide, swaz sie wûrken, daz sulnt sie getriuwelichen wirken. Dû slehst etewenne ein îsin an ein ros, daz ist îtel kis, unde gêt lîhte dar tîffe kûme eine mîle, unz daz ez zerbrichet, unde mac der von erlâmen oder er mac dâ von gevangen werden oder den lîp verliesen; oder einem erbeitenden manne, der ez tegelîchen ment unde trîben muoz in wagen und in pfuoge.

(16)

これらは金細工師、貨幣鑄造者、その他の金属細工師、大工、鉄工、その他の鍛冶職、石工、ろくろ師、何を使ってどう仕事をしようが、これら職人は皆同類であつて、なくてはかなわぬ人たちである。彼らは日傭いとして働こうと、大工、石工がよくやる請け負いで働こうと、だれでも仕事が正直で真面目でなければいかん。一日いくらの時は、できるだけ仕事が長くつづくように、わざと手を休めたりしてはならぬ。また請け負い仕事となると、急に手を速くし、さっさと仕事を終えて一年か二年して壊れるようなものを作つてはならぬ。すべてに自分のものを作るような気持で誠実に作るのじゃ。おまえとても、他人が心をこめておまえのために働いてくれればうれしい。他人が誠意を見せて働いてくれるのが有がたいなら、自分も隣人のために誠意を見せるものじゃ。金細工師であれ、その他の細工師であれ、作るときまったものは真面目に作るものよ。さておまえが蹄鉄工として、あるとき人の馬のひずめに鉄を打つとする。それが鍛えてない鑄物の弱

い鉄だと、馬が一マイルも歩かぬうちに鉄は割れ、足を引きずる。それが原因で乗ってる人が盗賊につかまる、命を落とすということにもなる。御者とか犁を押す農夫も毎日馬を追って働いているが、おまえから迷惑をこうむることだ。

蹄鉄一枚の品質が人の命にもかかわる。売られた物がしばしば人の運命を分ける。危険にあふれた時代には、物の売買すら意外な結果を呼ぶことがあった。この僧はほとんどすべての職業行為を他人に重大な結果を及ぼすものとして話している。ふたりの偶然の出会いと売買の意味はこれほど掘り下げて考える必要があった。物を作って売ることの倫理性を問いつめる彼が、細工師の中でもさいころ作りの職人を誹謗するのは当然である。

Wan ez ist etelich amti, dem dû niemer rehte getuon mahi; des solt dû dich abe tuon: als würfeler und schappeler unde die dû langen mezer slahent, dâ manic mensche mit ermordet wirt. Wande die würfeler die mügent ir ante niemer rehte getuon, sie geben wénic oder vil umb einen pfenninc. Dû kanst im niemer rehte getuon, dâ von tuo dich sîn abe, oder diner sêle wirt niemer rât: wan ez geschicht manic tûsent sünde von würfelspil, die sus niemer geschæhen: manic tûsent lip unde sêle werdent verlorn, die sus niemer würden verlorn, der niht würfel machte. Dâ kumt von mort unde diepstâl, nû, zorn unde haz unde trâkheit an gotes dienste.⁽¹⁷⁾

それというのもまともな職業と呼べないものが幾つかあるからだ。こんな仕事には近よらぬがよい。さいこ

ろ作り、女の髪飾りを作る職人、多勢の人を殺すことになる太刀を作る鍛冶など。というのもさいころ作りは一ベニーもらって何個ほど作るか知らんが、とにかくまともな職業ではない。人の歩む正道ではないから、今すぐ止めるように。でないとおまえの魂は地獄に落ちるのだ。さいころさえ無ければ起こりようがない何千という罪悪が、さいころ賭博によって起こつておる。さいころを作るものが居なければ失われることのない何千という肉体と魂が失われておる。さいころから起こる悪事とは、人殺し、盗み、恨み、怒り、敵意、それに不信心だ。

個人の職業行為が、日ごろふれ合う人に深い跡を残さずにすまぬ。拡大した市民社会では、個人の行為は集団の中に跡形もなく失せるが、ここでは深い陰影を引きながらいつまでも記憶されている。人の記憶から消えても、神の記憶をのがれることはない。簡単な物一つ作って人の手に渡すことの意味深さが正面から問われている。人間の行為は、どれほどささやかなものであろうとも、跡形なく消えるものではない。だが粗雑な目にも分かるほど大きい結果が残らぬ限り、人の行為は消えたものと信じられやすい。

職業は人類が長らく社会的献身、または奉仕として自覚してきたものである。職業は、当人がそれと一体となるとき、ついに神と人への奉仕となる。近代の職業概念は、とくにこの点で低下している。労働の物質的側面だけが評価されて、職業の人間的な意味、本来的な意味がますます排除される。職場の神経症患者や劣等感にさいなまれる職業人が増えるわけである。人間関係の形成を通して職業の意味や本質をとらえることが、現代の機構に十分そなわっていない。現在の職業労働は人間を即物的な打算に偏らせた。労働の非個性化が人の職業生活の

中身をうばったのである。

本来の意味で職業を選んだものは、自分の人生に務めを課し、犠牲をもとめ、むしろそこに抛り所を得ている。生活の資が得られることは二の次である。永久に当人をとらえる価値ある行為が人間の職業を成り立たせた。職人が家で作ったものを往来に出て売っている。買うのも同じ集落の顔なじみである。売買の關係が簡単なだけに、共同社会に占める自分の役割はもとより明白である。説教僧は「他人が誠意を見せて働いてくれるのが有がたいなら、自分も隣人のために誠意を見せるものじゃ」といった。ここには恩義に涙し、損害に復讐する確かな生活の基盤があった。ひとりの行為はつねに複数の目によって検証されている。ここには職人や商人の悪事が多く報告されている。だが長年の間にこれらの手口は知れわたっていたに違いない。僧は第一発見者ではなく、積年の惡に反省をもとめているのである。このような元始の社会では、職業が欲得ずくで変えられるのではなく、生まれるとともにほとんど決まってしまう生活の枠であった。年の経つうちに人が枠をみだして、枠が必然的なものとなる。僧はまたいう「金細工師であれ、その他の細工師であれ、作るときまったものは真面目に作るものよ。」職業であれば、欲得を離れてだれしも深い決意をその仕事ぶりに見せなければいかん。自分のためか、他人のためか区別なく、物を作るといふ行為の出発点に立ちかえれという。金をとるための行為なら大したものではない。僧は何気ない言葉の中に批判を伏せる。批判と批判の間に、同時代のおびただしい惡の群像が居ならぶ。聖と俗の至近の対決から、この時代にそなわる純粹無垢な力の大きさが感じられる。ふたたび惡の群像にもどるならば、家一軒と多くの靴を交換するときのように、初期の交易は等価値の判断に大きい不安を感じることが多かった。かけ離れた二つの物品は、何を基準にバランスをとることができようか。ここにこそ商業の惡がつけ入るす

きがあった。彼は心理作戦に出る。



売買の成立 (1475年頃の木版画)

Unde sô dû eteswaz koufen wilt umbc einveltige liute, sô kêrest dû alle dine sinne
dar zuo, wie dû ez im umbe sus an gewinnest, unde tuost im manige lügen vor,
wie wol dû ez weist, daz ez wolvel ist daz dû umb ez koufen wilt, unde heizest
dinen gesellen ouch dar zuo gên, unde gêst dû danne eine wîle hin dan unde seist
im, waz dû im drumbe geben wilt, unde beizest in, daz er im minner drumbe
biere: sô erschricket jenz unde wolte gerne daz dû hin wider umbc giengest, unde
gewinnest im ungetriuwelichen an. Unde swerest aber sô: 'zwâr, seist dû, 'bî
allen heiligen! iu gibet nieman als vil drumbe als ich.' Sô gebe im ein anderz nichels mêre drumbe danne dû.
(18)

おまえがのろまな奴から何か買おうというときには、そいつからだただ同然で巻き上げるために智慧をしぼる。いかに安いと知っていても相手にはでたらめをいう。家の若いものを呼んで、少し離れた所へ行き、おれはいくら出すつもりだから、おまえ、奴にはそれより安い値を吹っかけろという。売り手は若者の値が安いのに仰天し、先のだんなが帰って来ればよいと思っている。ここへ現れたおまえが男をだまして安値で落とす。それでも口先では「まったく、すべての聖者さまにかけて誓ってもよい。おれほど高い値をつけるものもあるまいて」などという。実際は次にだれが通りかかって、もっと高い値をつけるはずだ。

商人の言葉はつねに作意をふくみ、計略を持っている。中世の商人は目的をとげるため、キリストや聖者にかけてよく誓つてみせた。冒瀆も甚だしいものである。僧が商人の言葉を訂正する一節がある。「その値段では高すぎる。でも仕方がない、わざわざこれを買うために来たんだから」というおまえの言葉もこんな風に改めるべきだ。「先ほどこちらがいった値段にしてくれたら、有がたく思うよ。それができないなら、君のいう値で買うしかないね。」おまえが売り手となつたとき、罪作りをしたくないなら、ここでも取引きに誓いは無用だ。「あなたが買いたくないなら、別の人がだれか買うだろう。」こういつて嘘をつかず、素直な言葉使いをするものだ。物の売り買いには特別の用心が要る。売り買いの言葉次第では幾千という人の魂が地獄にも落ちる。商いに詐り、欺き、嘘の誓いはつきもので、あまり多くて数え切れるものではない。売り買いするときにどれほどを詐りというものか、自分がいちばん覚えがあらう。⁽¹⁹⁾

僧の叱正をからかいでもするように、説教の中の悪はすべての職業分野に跳りようする。僧の熱情は悪を正すより、まず悪を描くことに注がれる。その言葉は聴衆の心にまず罵倒すべきものを呼びさます。教皇周辺はひそかに聖職売買に係わり、僧侶の妻帯もしばしば見られた。ドミニコ会修道僧は一ベニーの免罪符を各地に売り歩いていた。世を指導する聖職者に腐敗が見られるならば、混乱の中に放置された庶民も目先の利益に目がくらむ。帽子作りが手抜きをする。雨降りにかぶつて出て首筋に冷たいものが流れ込まぬ帽子は今では珍しい。羊毛、亜麻、皮革を使って衣類を仕立てる職人は、素材の半分をピンはねする。ウールを織るときに毛を混ぜる。引張つて丈をかせぐ。買ひ手がよい服地と思つても、引張つたものはぼろ切れに等しい。羊毛を紡ぐ女も泥棒する。少



にせの物差を使う商人
(1470年の木版画)

し自分用に盗んでおき、納める糸は湯気をかけると目方が重くなる。客の目の前で布地を盗むひどい仕立屋もいる。

wænest dû habest ein wîtez gewant, sô hât dû sîn niht.
(20)

Wan sô er sîn gewant vor den ougen snidet, sô verstilt
erz im vor den ougen: wan er leget die gêren lang an
den rok unde snidet danne daz breite abe unden an
dem gêren: sô dû wænest dû habest ez wol bewart, sô
hât er dirz gestoln, dû enweist hiute wie; unde sô dû

仕立屋が客の前で生地を裁つときも、はばかりずに盗む。上衣の裾に三角のふち飾りをつけながら、下にくれた幅広の生地を切りとる。客は気をつけたつもりだが、盗まれてしまう。どうしてやられたか、今もって気がつかぬ。布地たっぶりの服を着ているつもりが、実際は着ていない。

つづいて食品を商うものが槍玉に上がる。彼らは正しい天秤と分銅を使っているだろうか。店ににせの分銅を置くやつがいる。天秤が商品の乗った皿の方へかしぐよう手で操作する。客は商品を買ったつもりでも、じつは

受けとっていない。そのほかにせの物差を使うやつがいる。ろうそくの蠟にまぜ物を入れる、油に水やビールをまぜる。水をワインといい、酵母でふくらませば空気もパンということが出来る。子を産んだ母豚の肉を去勢豚といって売っておる。産褥にある女性や瀉血直後の人、そのほか体の弱った人がこれを食べると死ぬことがある。このようにだましてはだまされ、奪つては奪い返されることが果てしなくつづく。一体どうしたことであらう。このとき僧ベルトルトの一きわ高い号令が群衆の上に響きわたるのである。

「なぜ私が泥棒のやり方までわざわざ講釈しなければならんのか。仲間のだれかが親切に教えるであらう。だれそれが彼それから盗むと、翌日はまた彼それが本職に物いわせて、だれそれから盗み返せるようになっておる。そんなことをしても、おまえた少しも偉くなっておらん。その身に罪を重ねておるだけじゃ。おまえたちがだれもかも誠実になり、手にしたものに汚れがなく、それで施し物でもすれば、身も魂も清められてそれは結構なことになろう。なにゆえ職業を行うのに、もっとも身近な兄弟をだましたり盗んだりして、わが財産を汚すのじゃ。われわれはお互い神さまにとっては兄弟であるぞ。⁽²¹⁾」

職業生活において今こそ人びとが「愛の共同体」に帰ることを説き、はてしない愚行を終えるよう僧はもとめるのである。

注

(1) Berthold von Regensburg: Vollständige Ausgabe seiner Predigten, herausgegeben von Franz Pfeiffer. Wien 1862, Bd. I. S. 16. Z. 23ff.

Wê dir, manteler, dû kanst ouch diem amte niemer rehte getuon! Dû machest einen alen hadern, der fül ist und

ungenæme unde dâ mite man billîcher eine want verstieze, wan ez zuo anders iht nütze sî: daz vernâdelt er und machet ez dicke mit sterke unde gît ez einem armen knehte ze koufe. Der hât vil lîhte ein halbez jâr dar umbe gedienet, und als erz angeleit, sô wert ez in niht vier wochen, ê daz er aber ein anderz muoz koufen.

(2) Berthold S. 16. Z. 32ff.

Sô sint gebûre als wol trûgener sumelîche als die in der stat. Fûeret er ein holz dar in, er leget daz krumbeste ze mitels in unde daz stehet ûzen unde verkouft den lûft für holz. Sô leget der daz hûn ungetruckent in den wagen unde verkouft ouch lûft für hûn.

(3) Berthold S. 87. Z. 7ff.

(4) Berthold S. 85. Z. 2ff.

Als ez der meister siht wirkent sie die wûrthen gar balde; unde sô er sîn niht mêt siht unde den rûcken wendet, sô rîhtet êr den rucke ûf unde mærsaget unde lûwert, und ie zwêne oder drî wirkent etewanne eines tages ein tagewerk klûme. Daz selbe tuont dierne und knehte. Als diu katze ûz kunnet, sû rîchsent die mûse: als ir hêrschaft ûz kunnet, sô hebet sich grôz unzuht von iuwerri êhalten unde grôz ringen unde scherzen. Als diu hêrschaft danne widerkûmt, sô ist daz werk ungeworht, unde sint vil lîhte zwêne schaden oder drîe geschehen, die sie wol erwerdent solten hân.

(5) Berthold S. 59. Z. 15ff.

Wan er alliu dinc mit wîsheit geschaffen hât, dâ von hât er mit wîsheit daz ouch geordent unde geschaffen, daz alliu disiu wert gewant genougez hât gehabet unde fleisches unde brôtes, ze trinken met unde wîn unde bier unde visch, wilt unde zamm, des hât er alles samt glich genuoc geschaffen über alle die wert, reht als genuoc er die sternen an dem himel hât geschaffen, ob einiges sternen gebreste an dem himel, daz alliu diu wert deste wîrs môhte an gesuntheit und allen guoten dingen. Rehte als glich als er die sternen geschaffen hât an dem himel, daz ir weder ze vil noch ze lûzel ist, als gliche hât erz ûf errîche geschaffen, silber, golt, spîse unde gewant. 'Owê, brüoder Bertholt, sô hât erz gar unglîche geteilt! Wan ich unde manic armez mensche enbîzen selten iemer daz dâ guot ist, ezzens oder trinkens, unde haben weder golt noch silber noch gewant.' Sich, dâ hât dirz der abbrecher abe gebrochen; der mit wuocher,

der mit roube etc.

- (9) Berthold S. 257. Z. 31ff.
 - (7) De regimine principum ad regem Cypri II., c. 3.
 - (8) Politica I, c. 3. §1–23
 - (6) Politica I, c. 3. §10
 - (10) II, II q. 77, a. 4, c
 - (11) Albertus Magnus I. c. 9 (31)
 - (21) II, II q. 77, a. 4, c
 - (23) Berthold S. 131. Z. 32ff.
 - (41) Berthold S. 17. Z. 10ff.
 - (49) Berthold S. 86. Z. 20ff.
 - (91) Berthold S. 147. Z. 10ff.
 - (17) Berthold S. 14. Z. 33ff.
 - (81) Berthold S. 149. Z. 14ff.
 - (61) Berthold S. 149. Z. 38ff.
- Sô sprichest dû: ‘ez ist gar ze tiure umbe daz selbe gel, wan daz ich eht dar zuo bin komen.’ Dû solt sprechen alsô: ‘gebet ir mirz alsô, ir sît mir deste lieber, als ich dâ gesprochen hân. Tuot ir des niht, sô muoz ich iu dâ mite lâzen tuon daz ir wellet.’ Unde wiltû dich behüeten an hingeben, sô soltû aber niht swern. ‘Koufet ir sîn niht, sô koufet ez vil lhte ein ander man’, und ouch sleht âne lügen und âne trügenheit. Und alsô solte man sich an koufe hüeten, wan ez wirt manic tûsent sêle verdampt umbe kouf, wan der selben trügenheit unde valscheit unde swerens des ist sô vil, daz ez nieman verreden mac. Ir wizzet selbe aller beste, wie lügenheit unde trügenheit an iuwerem koufe gescheffe ist.
- (20) Berthold S. 17. Z. 27ff.

(12) Berthold S. 17. Z. 35ff.

Wie solte ich etelichen diepheit lēren! Sô gelēret dich einer dīn genōz vil wol. Alsô stilt der dem, sô stilt er dir morgen her wider mit sīnes amtes trūgenheit. Unde dā von künnet ir niemer iurre werden; wan diu sūnde nimet an iu ūf. Wæret ir danne alle getriuwe unde wæren iuwer gewinne reine, und ob ir ein almuosen dā von gæbet, daz kærne iu ze staten an der sællichkeit lībes unde sēle. War umbe verunreinesi dū dīn guot mit trūgenheit oder mit diepheit mit dīne amte an dīnen bruodern, daz ist an dīnen næhsten? wan wir solten alle einander gebrüeder sīn in gote.